

第20回JKA全国大会・DKS学会報告

第1日目 JKA令和元年度定例理事会・総会

南大塚地域文化創造館 1階第4会議室

13:00~ 理事会

理事会出席者

吉富賢一理事長、坪井友里副理事長（近畿支部長）、渡辺健次理事（九州支部長）、山口厚司理事（中国支部長）、森雅泰理事、河本悦子理事（関東支部長）、馬目徳裕理事
＜監事＞山田雅英監事、岡隆章監事：欠席

2018年度事業・決算報告・事業計画・予算

・近畿地区：慢性期医療展に出展し、新会員獲得の成果なく赤字であったが11月に基本講座実施で、月例会出席率アップにより黒字に回復。砂浴も少人数であるが実施している。

・中国地区：災害の影響で思うような活動ができなかった。新会員の獲得や月例会出席率アップが難しく昨年度迄2カ月に1回は理事長を招いての月例会が実質上不可能となり、4カ月に1回で運営している。月例会以外を月例セミナーと称して行っている。若干の赤字。

・九州地区：隔月月例会を今のところ5人出席守って実施し、砂浴健康会を一般参加交えて継続。

・関東地区：月例会出席率を有志勉強会での補講費を月例会費として集金して数年の赤字を解消。12万円余りの黒字に回復。砂浴会も外部参加者交えて実施。派遣のDKSインストラクター引き受けを実践の柱にして、ようやく今年度基本講座を実施予定。今年度の全国大会は月例会参加会員が全員発表する。

本部は各地区の集計である。基本講座を実施し、新会員の獲得ができないと運営が厳しい。前回の理事会で本部理事として吉富理事長、近畿支部理事坪井副理事長退任。新理事として西谷仁孝、関東は河本悦子留任で月例会に毎月は参加できない馬目会員が退任。中国は山口厚司留任、森雅泰退任。九州は渡辺健次留任。各地区1名代表理事で、運営経費を抑えて、各地区会議で参加会員の協力と意見を取り入れ地区ごとに基本方針守り、創意工夫と、地味に、堅実に、黒字体制で運営することを決議していたが、改めて今回の理事会で新体制を決議し、総会に問うことになった。途中臨時理事会を開き、理事長吉富賢一、定例理事会開催地の理事西谷仁孝理事が副理事長に指名された。

・事業計画・予算案は総会書類の通り。



DKS実践とは月例会の出席者が増えること!!
吉富理事長 熱く語る



西谷仁孝副理事長 新任の挨拶

理事会 2019年度運営方針

- 第1：認定前の正・準会員の月例会出席率を確実に上げる。
- 第2：認定前の会員には特に家族・友人・顧客の月例会無料体験を行い、その後フォロー（貼り替えする）を奨励する。
- 第3：認定済で開業している会員は、成果が不十分な顧客を月例会に同伴する。

15:00~ JKA 総会報告：27名の正・準会員参加

- ・1年間実施したNPO活動やDKSの広報活動を報告しあい、健康の輪を拓けようとする会員が集まる全国大会及び総会である。今回は準会員のオブザーバー参加を含め、出席会員14名理事9名であった。・正会員総数35名、出席者数13名（監事除く）欠席委任状18名にて、合計31名となり、過半数を超えており成立。九州地区会員高瀬剛会員が総会議長に選任され、上記理事会の役員事業・決算報告・事業計画・予算案を出席会員の前で審議し、新役員5名の体制も承認された。
- ・準会員は総会出席の義務はない上議決権もないが、JKAが活動を盛んにする為には、JKAの母体である家庭健康研究会で、実際にDKSを利用する会員に身近な地域住民に対する健康指導会の実施と、地域ぐるみ町ぐるみの医療費の削減と、健康を維持するための運動習慣を、JKA会員全員が主となり、自らの周辺からDKSを使って健康回復をすることをDKS事業とする会員の存在が欠かせないことを確認し合った。他の医療資格や健康資格での活動を主にする会員以外は、できるだけ筋機能調整を標準的に行えるよう正会員となり、JKAの団体保険に加入して活動してほしい旨を繰り返し説明している。
- ・引き続き懇親会前のDKS事業を行う為の講話からが準会員の参加時間ではあるが、関東支部は認定前の準会員も多く理事会・総会の運営を手伝っていたこともあり準会員は全員オブザーバー参加とした。
- ・総会資料は正会員のみしか配布されていないことを一部の準会員が不満であったという意見があったと聞いています。基本講座を受けるか入会手続き以後6回以上月例会に出席した会員には、関東支部では正会員に切り替えを勧めている。自分が認定試験を受ける迄は準会員でという頑なな考えの方もあるので、今回正会員になる事の大切さを理解して戴く為にも総会への準会員オブザーバー参加は非常に意義があったという声が多い。



総会参加者

16:20~ 総会終了後の参加家庭健康研究会会員全員の自己紹介と交流時間

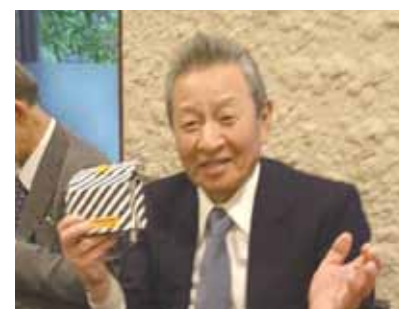
NPO法人としての形式や行政に合わせる細かな事務上の作業は、理事長指導の下本部が全面的に実施して下さっている現状に甘えるのは心苦しいながらも、月例会の時のみ全国大会の時のみ協力する事はできてもそれ以上のNPO活動は、吉富理事長の言われる通り家庭健康研究会でDKS事業を自らの生業にすると確信を持つ会員でないとできません。月例会の運営はまだDKS事業が成り立ちにくいという段階のDKS研修生の学びに最適です。今回参加の関東会員が、DKS事業者として仕事が忙しくなれば、月例会への出席もままならぬようになるか？全国大会だけは出られるか？を見据えて、全国大会の参加者は全員、準会員であっても総会のオブザーバー参加ができるように新体制の役員会にはお願いしたいものです。

17:10~18:00 “DKS健康指導”というスキルを活かし、沢山の高齢者とその家族を健幸に導くプロフェッショナルに！

産業カウンセラー 松本 卓 先生による

※経済産業省：地方創生産業局は「ヘルスケアビジネス創出で地方活性化へ」とうたい、推進中とのこと。中身は、ヘルスケアビジネスは、・地域に雇用創出、・地域コミュニティの活性化、・医療費抑制、推進中。

※ニューヨーク大学：ポールゼン・ピルツァー教授の著書に「次の100兆円産業」はヘルスケアビジネスを挙げている。今後伸びる産業分野は、ヘルスケアビジネスと言う事。



※“お客様にとって最高のサービスとは”？

- ・お客様の事をしっかり永続的に覚えておくことが最高のサービス。
- ・記憶力とは筋肉のようなもの。よって、継続にはメモ取りは非常に大切な行為。それを如何に活かすか！
- ・人間、痛みには敏感で、弱いのに、痛みが無くなれば忘れるもの。特に、施術後のフォローの見届け。3日後、7日後、1か月後は大事。“生涯の健康傘”を持し、何時でも対応する使命感と行為が最高のサービス。

18:00～ 懇親会：32名が参加!!

無敵剛介先生に乾杯の音頭を取って戴き開始。久留米から大塚駅迄一人で電車に乗り飛行機に乗りモノレールに乗り、DKS学会の為に来て下さった無敵剛介先生に、参加者一同大感激!!



黒川胤臣先生とは日本補完代替医療学会（10年余り前の金沢市で）でお声をかけ、河本⇒理事長⇒無敵名誉会長という繋がりができました。現代医学の学徒で、東洋医学の本質を理解し、現代医療の治療に取り入れることのできる医師は実に少ないことが、黒川先生からお教え戴き、数ある東洋医学通の現代医学の博士たちの中で最も無敵先生の実績が評価されていると、外科医でありながらゲルマを癌患者にもお使い下さり、DKSを関東では一緒に学んで下さる黒川医博は、防衛医大を退官し、その関連病院への勤務以外にご自宅で土日に難病を、独自の治療法で診ていらっしゃるようで、懇親会中は無敵先生と研究のお話しが弾んでいらっしゃいました。



松本先生のお話しは、JK Aの会員減少を憂えたもので、長年見守ってきたDKS事業の担い手が増えない事、長く勉強している者のDKSを広く社会に普及する推進力を持つ後継者が育っていない事を憂えての、叱責苦言もありましたが、何より産業カウンセラーとして、もっとも日本的な、日本の健康長寿を支える基幹産業となるべき“DKS”と信頼して下さっているからこそです。



吉富理事長が「実践すれば全てわかる!!」を吉富理事長にも実践の場を与え、一緒にチームの一員として支援して行動してくれたからこそそのアドバイスでした。



その言葉を受けて皆さんが厚く語り合った懇親会、関東会員の中から、DKSのオリエンテーション講座を、専門家気取りをふるいにかけて、JK A・家健会を支える会員候補のリクルートと、よいお客様候補には顧客づきあいをしていこうという「ちょこっとDKS講座」を考えた関東グループ一同からは、「松本先生の精神を吉富理事長は大切にしてきたからこそ、JK Aを創立して我々もそれを継ぐんだね」という言葉がありました。

JK A正会員でも家健会の仕事に携わってきた関東会員でも、15日のDKS健康事業主への講話が聴けないで、翌日に今大会のメインテーマ「100歳の時代を生きる智慧」を聴講した方も、是非このレポートを読み大会抄録を読み返して、日本ならではの人間関係の中にある超高齢者皆様を敬い自立して100歳時代を生きる力の根源に筋肉が関わっており、筋肉への指令は小脳からであり、筋力バランスをとるのも小脳であり、小脳が健全である為には自分の足で立ち自分の用事を自分で済ませる筋力の維持である、という現実を目の前で示すことができるDKSを学んで、自分がこれから何をどうするか?をご一緒に考えませんか?



第2日目 DKS全国大会 学会 研究発表・講演会

南大塚地域文化創造館 1階第4会議室

9:30~ 会員研究発表 出席会員 12名 18題を発表

中村真人「ちょこっとDKS」・河本悦子「顎関節症に対する検査すべき部位」・JSCA更新とポールデウォーク「DKS派遣業務を引き受ける重要性」・坪井友里「赤ちゃんだっこで痛めた肩と手の痺れの改善」・西谷仁孝「股関節の痛みの臨床例」・芝本絹子「DKS実践・母に対する継続DKS指導の報告」・座位での腰・下肢重要筋の検査」・吉井知美「転倒による足首の捻挫」・海沼ひろ子「姉にDKSを紹介して」・足部の反転が生み出すネジレと頸椎の痛み」・内田和久「不定愁訴の追跡」・「距骨矯正ってなんだ!？」・北條もと子「DKSの基本手順一痛みと不定愁訴の同時改善」・NPO法人膝・腰学会参加報告」・溝口寛実「痛風関節炎OFFの事例報告」・馬目徳裕「水虫治療に関する一症例」・早川雅浩「DKSを始めるきっかけ」。(海沼、吉井、馬目、早川関東スタッフが和室で絵の教室・お茶の接待の為昼休みに発表となりましたことをお詫びいたします。)

10:30~ DKS療法の理念に基づく近代統合医療と超高齢社会 無敵剛介先生

センチュリアン（百寿者）には、女性が殆どである。しかし、105歳では生活機能樹立＝ADLでは男性18.5%・女性8.6%は筋肉の質量ゆえ？の差異が見られる。

高齢者の多くに感染症ではない慢性炎症が見られ、内臓脂肪組織炎症は全身の代謝の促進を低下させて、テロメアに損傷を与え、免疫力の低下を招く。空腹や赤ワインのポリフェノールによって活性化される長寿遺伝子＝サーチュイン遺伝子はテロメアを損傷から守り、過呼吸などは慢性炎症を亢進する。「呼吸を深く長く、過食をせず、長寿遺伝子を活性化させて、テロメアを損傷させずに、ADLを保つ生き方」これが健康長寿である。DKS療法が健康長寿の促進を図るものであるかを決定していく因子をサジェストして下さる無敵先生の講演が初めて腑に落ちた、という全国大会二回目参加の某会員からの報告と、坪井会員のメモから推定でまとめてみました。



デカルトは心身二元論で、松果体は頭頂眼ともいわれ、目から入る力で筋肉に経絡流の情報＝ボリュームトランスミッションが入ると心身が結合した動きが現れることを示唆している。現代西洋医学は、身体に対する治療に主眼し、細部への探求目覚ましいが、心のエネルギーが身体のエネギーと共に働くことで臓器も血管も又筋肉であることから、超高純度半導体ゲルマニウムが、心と身体のエネギーを結び、微量栄養素の適時適量の供給により、テロメアを損傷しないゆるやかな百寿者の、健康の在り方に寄り添い寿命を全うし、周囲を幸福にできる智慧を後進に伝える「DKS道」を未来につなげたい、と感じます。

11:00~ 東洋医学に基づいた治療食としての栄養 —9800シリーズのご紹介

佃 和年 先生

漢方は経験に基づく医療であり、科学的根拠のない時代に試行錯誤の中から最良の方法が選ばれたもの。蓄積された大量のデータから治療方法を実践的に当てはめて、その条件を様々なケースに当てはめる理論が生まれたこと「証」の理論。(実践の中で誤ったものは淘汰された。)現代科学の成分分析では漢方の「証」に対して効果が出ていても、科学的根拠の示せないものもある。そういう中でDKSはアメリカの臨床栄養学の理論とサプリメントをアームテストで確かめ、ヤマダ薬研の漢方素材を用いる製薬会社としての経験と製造能力に頼り、現在の9800シリーズなどをDKS製品として開発普及してきた。佃和年先生は、薬剤師でありながら、漢方薬の成分と証に基づく使い方を大成した柴田良治医博に師事され、薬剤師に漢方を指導する教官の経験も経て、薬事法などから継子扱いされやすい和漢薬の優れものを扱う(株)ヤマダ薬研の直営漢方薬局の責任者となられ、今年度からJKA近畿でDKSをも一緒に学んで下さっていらっしゃいます。

これまでに作られ今ではなくてはならぬものに育った、D K S サプリメントの薬学的裏付けを踏まえて、D K S の栄養検査で目の前で痛みや動きが変わる様を、月例会での臨床でD K S でも確認し、薬学的知識のない会員と医薬品の弊害に苦しんできたD K S の愛用者の為に、又未来の未病を求めるD K S 愛用者候補の為に、我々が病気を追わぬよう、健康維持増進の守備範囲でD K S 健康指導師が活躍できるように、医療従事者の立場からの「規」を教えて下さります。

今回はコースプレックス・バイタルプレックス・キャットクロウを取り上げて下さいました。佃先生は医科学的成分分析からの製品の適用範囲を踏まえながら、食品の範囲であるが故に医薬品との併用などが必要な場合のお客様には強力なアドバイザーとして、D K S での可能性を見守って下さる立場です。健康管理は社会人の嗜みであり、誰もが病気にならず人生を全うできる医学薬学の観点を佃先生から学ぼうではありませんか？

11:00~ 和室 赤平絹恵先生 (プロの書画製作者) による「ちょこっと絵話 (かいわ)」



& 馬目徳裕亭主による「喫茶の会」

愛用者の方を8名ご接待、別室の会員にはお茶の出前もありました。

12:30~ ランチョンミーティング：家庭健康研究会

C-COREマット・座クッション：坂本幸一/D K S 製品ゲルマ・サプリ：吉富賢一
/ 宝箱酵素：小川房子/D K S ゲルマを用いたコリトリール - ルジュエリーで
D K S 健康指導師の雇用を創成/D K S サプリを飲むミネラル水：芝本絹子
/ ヤマダ薬研(株) 山田雅英

D K S 製品のメーカー代表が前に出て出席者全員にD K S 製品のアピールをしました。



13:15~ 100歳の時代を生きる智慧 松本卓先生



・高齢化社会とは？金持ち、時間持ち、病気持ちの時代とも言われます。製薬会社や薬局が儲かり、葬祭場が多忙、火葬待ちが当たり前の社会と認識すべし！の時代でもあるということ。

・100歳時代の老後は長い！70年前、平均寿命は男性50歳、女性54歳弱。昭和30年でも男性63.60歳、女性76.75歳。還暦は目出度く、卒寿の祝いを迎える人は非常に稀だった。

・今や(平成29年度データ)特定の年齢まで生存する割合は、65歳・・・男性89.4% 女性・・・94.5% / 75歳・・・男性75.3% 女性・・・88.1% / 90歳・・・男性25.8% 女性・・・50.2% / 95歳・・・男性9.1% 女性・・・

25.5%女性の2人に1人が卒寿を祝える時代。国は65歳定年、70歳定年へと旗を振っていますが、まだ多くの会社の定年は60歳。そこから老後と捉えると、男性は平均20年強、女性は30年弱。人によっては40年近くなる。40年と言えば、成人から定年までの期間。よって、老後は長い！会社の定年とは別に一人ひとりの体力、価値観、志向によって「自分の定年」は違っていいのでは・・・。

・新しい仕事、新しい趣味、アルバイト、お話し相手のボランティア、共働き世代を助けるための託児所、観光ガイド。更には、健康お助けマンよろしく実益を兼ね備えたD K S 活動。

*人様に何か価値を提供する事は、生き甲斐に繋がります。「やらなかった事を後悔する人生」よりも「チャレンジし続ける人生」の方が楽しいものです。

・このD K S 活動は「生涯現役」を続けられ、日本国民を心身共に壮健に導ける立派な社会活動となり得ます。それも、実益を兼ねた活動。

・長い老後を生きる二大ポイントは？一に、心身の健康 二に、お金。

・心身の健康とお金は常に一緒に付いて回る。老後、特に75歳を超えると医療費、介護費が毎月数万円の支出。

・個人差が大きくなるもの70代からが特徴的。よって、毎日の運動習慣と外出回数の確保が大事。

・D K S のアームテスト、ゲルマ貼布の筋機能調整法。ゲルマは、即効性抜群、副作用なし、腐らない、半永久的、軽くて便利、どこでも使用可能、一度購入すれば末代まで使用可能ご家族での使い回しが出来る 等々。

・現代は様々なストレス感の負荷が掛かる時代。老若男女問わず。肉体の健康は心の健康に比例します。

13:45~14:30 ポールデウォークの木谷道宣理事長から応援スピーチ!! :DKS学会へのメッセージを戴きました。

DKS愛用者の個人指導:15人

吉富理事長と河本、家健会関東メンバーで対応し、内2名の方が基本講座受講、1名が再受講決定。

14:30~ 民内利明会員による「怪我をしない身体によい動き」:理論と実践

日本社会のヒエラルキーで良い運動方法を教える勉強を充分していない、選手としては身体能力が優れていても伝統的な根性論での運動指導の体制から抜け出せていないため、日本の運動競技ではまだまだ力を出せない選手や才能を伸ばせずに選手生命を終える人も多い。自分も皆さんに伝えて皆さんが会得してスポーツ界の人材の底上げを目指して努力してきたが、なかなか理解して貰えぬ指導層の頑迷に阻まれている。この基本となる動きの開発はDKS検査によって確認し推し進めて、アマチュアスポーツ界の無名選手を押し上げてきた。

世界最高峰(オリンピック)の陸上選手や動きにスピードが求められる競技選手の好成績を出した試合時の動きを観察すると、体幹部からの力の発揮をしており、筋力バランスも良く関節の柔軟性を失わずに、競技成績を出していることが分かっている。格闘技など身体を防御するスポーツでは全身の筋肉を増強し、筋肉を鎧のごとく使い怪我をしないという意味合いでの筋力トレーニング効果を認めるが、身体重心移動を争う競技では筋トレによって柔軟な動きが逆に封じられ故障を招くということにも気が付いた。特に末端部だけを鍛える筋トレを封印して、運動のアップからクールダウン迄、効率良く、故障を未然に防ぎ、大切な競技会でその身体能力を最高に発揮できる運動方法を考えてきた。関節の柔軟性を



保ちながら、スピードある怪我や故障しにくい筋肉の使い方は末端部に余計な力を入れないで、末端部の筋肉トレーニングはしない方が良くと考え、比較的どこにでもあるパイプ椅子を使い、練習や試合などでフル稼働すると、硬くなりやすい股関節の屈曲伸展運動を前後左右バランス良く行うパイプスクワットを考案した。各種スポーツ競技でトップを目指しながらも故障に苦しむ中高生や大学生の動きの指導に使い、有効であることを確認した。その指導の有効性を全ての運動指導者に正しく伝える為に、東京大学大学院教育学研究科にて「故障をし難い基本の運動動作(疾走・歩行)」として論文を発表してきた。さらにこの基本の運動法について、全ての競技スポーツに応用できるより良い動きの指導が出来得る理論を研究している。パイプスクワットでの柔軟性回復指導は、バランスの悪い股関節の使い方股関節が固まってきた中高年以上は特に運動フォームは似ているように見えても、思ったような運動効果はなかなか出ない。そんな中、正しくできたと思っても、時間が経って見直すといつの間にか誤った方法に変化している、という実態に気が付いた。

近年分かりやすく簡単にできる「開脚四股フォーム股関節屈曲伸展運動」(仮名)を基本の運動として開発した。このフォームは、最初は、股関節を180度近く開脚し、足部も180度直線上で開き、その状態をキープし、背筋を伸ばし視線を真直ぐ正面前方に向けた状態から始める。日頃運動習慣がない中高年以上は、この姿勢を作ることが出来難い。若いスポーツ選手でも、これまでに誤ったトレーニングで筋力バランスを崩している場合も同様である。この姿勢で膝から下を動かさず、臀部を上下にリズムカルに運動させることで股関節を柔軟に保ち、体の中心の股関節に貯めた力を発揮できるといった癖がつく。また、運動することによって、バランスを崩す動きになっても、運動後この股関節屈曲伸展運動を、10回3セットすると股関節の柔軟性を回復し、偏った筋肉や末端に力が入っていたバランスを回復できる。

一流のスポーツ選手の競技成績にも反映するこの基本の動きは、中高年・高齢者にもその人なりの股関節周辺の柔軟性を回復できるし、その回復を実証できる。ゲルマを貼った後の運動習慣として、DKS健康指導師は是非活用してほしい。

16:10~ 2020年度開催地 近畿支部 支部長 西谷仁孝 挨拶。

16:20~ 閉会の辞 関東支部 全国大会実行委員長 中村 真人